37　元明鍼灸書における鍼灸歌賦の採録数について

河内　輝美
日本鍼灸研究会

鍼灸歌賦（歌訣）は，宋から明代にかけて数多く作られた，鍼灸をテーマとする韻文形式の文章である．

鍼灸は後漢頃に隆盛したが，六朝時代以降，鍼法の衰退と経脈意識の相対的な稀薄化によって，南宋の前半頃までは，灸法による主治穴治療が主流であった．ところが南宋の後半から元代にかけて，鍼灸に大きな転換が訪れる．経脈の意識の高まりや，長らく低迷してきた鍼法の再興がそれである．それと同時に鍼灸を論じた歌賦が数多く作られるようになった．もちろん，鍼灸歌賦については，これまでも，時に医史学書などで低い評価を下される場合があった．たとえば有名な陳存仁の「中国鍼灸沿革史表」は，歌賦とその作者たちを口を極めて攻撃している．しかし，それと同時に，鍼灸のもう一つの隆盛期というべき明代の著名な鍼灸書がこぞってこれらの歌賦を多数採録していること，そして歌賦の中の技術を論じた部分に価値のあることを認めざるを得なかったのである．

現在，鍼灸歌賦は，概ね正しく評価されており，歌賦を集めた書物はいくつも刊行されている．しかしながら，鍼灸歌賦の種類や総数をはじめ，その全体像は未だ明確になっているとは言えない．そこで，今回は，鍼灸歌賦研究の基礎研究として，近世以前の鍼灸専門書に何種類くらいの鍼灸歌賦が採録されているのか，以下の様な条件のもとで調査を行った．

①調査対象資料は，歌賦（歌訣）が盛んであった，南宋代より明代の末までに成立し，かつ現存する，以下のような鍼灸書A～M13種とする．A『子午流注鍼経』，B『十四経発揮』，C『鍼経指南』，D『扁鵲神応鍼灸玉龍経』，E『鍼灸神書』（『瓊瑤神書』），F『鍼灸大全』，G『鍼灸聚英』，H『鍼灸問対』，I『楊敬齋鍼灸全書』，J『鍼灸大成』，K『経絡考』，L『鍼方六集』，M『類経図翼』

②鍼灸歌賦と判定する基準は，次のような条件を満たすものとする．a篇名の末尾が「歌」「訣」「賦」のいずれかで終わっている．b文章の形式として，五言または七言を一句とする韻文である（ただし金鍼賦のように詩と散文の間に位置する「賦」の形式をとったものも含む）．c鍼灸の内容に関わる文章である（蔵象，刺法，穴法，禁忌，あるいは広く鍼灸に関わると考えられるものを含む）

③文中の引用書目として出てくる歌賦は採録の対象外とする．

調査の結果は以下の通りである．

A：計3（歌1，賦1，訣1），B：計14（歌14），C：計2（賦2），D：計9（歌4，賦1，訣4），E：計5（歌5），F：計36（歌29，賦7），G：計59（歌48，賦10，訣1），H：計11（歌11），I：計35（歌28，賦7），J：計96（歌76，賦10，訣10），K：計28（歌28），L：計38（歌28，賦9，訣1），M：計48（歌47，賦1）

鍼灸歌賦を最も多く採録しているのは『鍼灸大成』であり，次いで『鍼灸聚英』である．このことは鍼灸歌賦の最盛期が1500年代であったことを表している．またこれら13種の鍼灸書において，最も多く使用されていた歌賦は「標幽賦（標由賦）」であり，7種の鍼灸書に記載が見られた．これに続くのが「通玄指要賦」と「流注指微賦」で6種の鍼灸書に記載が見られる．ただ，歌賦の数は甚だ多く，しかも異名同書や，同名であっても文字の異同の見られるものも少なくない．今回の調査結果を基礎として，今後はさらなる整理を行い，基本的な歌賦の数を定めるとともに，その内容の分類や医経との関係，さらに元明鍼灸に与えた影響についても研究していきたい．